

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第44巻6月号(通巻539号)

風土

6



西行峠

神蔵

器

いのちなり西行と佇つ青嵐
かうばしき西行の歌鳥雲に
西行峠地獄の釜の蓋の咲く
小夜の中山入口に桐の花
浮世絵の由比の高波春惜しむ

打つて出づ桜えび漁大船団

茅ヶ崎館 二句

緑立つ暈のへりの生真面目に

えにしだの花の奥より原節子

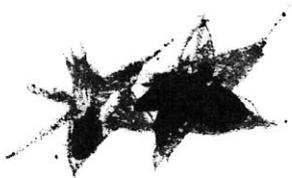
松の芯こぞる八丁馬場の跡

日時計に松は花粉を漲らし

扁額に「喫茶去」とあり白牡丹

雑草園

青邨恋ふ露の翁に露の姥



竹間集

同人作品



豆の花

鈴木とおる

蛭田の春田に傾ぐ藁塚三つ
常口に大雪柳ほしいまま
去年折りし亡妻の紙雛飾りけり
堰板を嵌めて用水水温む
水漬きたるこめつこ柳の芽吹きかな
啄木の北上川の柳の芽
火の島の段々畑の豆の花

夕燕

外川玲子

みちのくの水ゆたかなり夕燕
ほろほろと日の匂ひけりつくしんぼ
遙か来て花かたかごに何告げむ
どこからも日当たたる花の隅田川
トランペット吹くロボツトや山笑ふ
星一つ生れしあたりの春山家
木五倍子咲く風と光が走りけり

花林檎

山田暢子

桃咲けり夫とふたりのテイタイム
わが生れし家一本の桜の木
煌煌と春を灯して夫の留守
宅急便の中より伊豆の黄水仙
夜の駅出て春愁を持ち帰る
薔薇の芽のくれなゐ人は人愛し
花林檎咲けば母の忌来たりけり

舞 鶴 2

— 浜 明史 —

舞鶴や躑躅の丘に日章旗
引揚の丘や花見のロシヤ人
軍港の昔を今に鯉幟
鯉幟新入隊員上陸日
お出かけの高岳たかおか親王緑の日
千年の榧の芽吹きの下に居て
竹竿を曳き売るこゑや遅日光
余花の枝に雀や古今伝授の碑
突然に水噴く池や余花の丘
池を出てありく家鴨や薔薇の苑

青空に戀の指文字高雲雀
一呼吸六歩の試歩に亀鳴けり
うつりゆくことばを追へり鳥の恋
喫煙も煩惱濁や茎立ちぬ
シヤボン玉忘字忘事を重ねきて
ことの葉を心の種の噴井かな
山芍葉咲いて我が世の玉手箱
手をつなぐ二人に道や田水張る
金婚の袈裟に勿忘草の瑠璃
翅のあるものへかして花のかほ

山河集

同人作品



神蔵 器選

万葉の四時美恋歌 蜺汁 安永 圭子

啓蟄や一途の道のありてこそ
夢ふむむ小学校のこぶしの芽
茅花野の風の誘なふ国府跡
オーブンに川の字描く目刺かな

雪崩情報山麓駅の黒板に 池田加代子

猫探す貼り紙吹かる春一番
梅東風や曾我兄弟の五輪塔
百千鳥新村博士の散歩道
東山の峰が借景牡丹の芽

柿沼 罌子

びんざさら弧を保ちをり初桜
有明の砂をこぼせし浅蜷かな
ものの芽や雨粒の唱始まりぬ

バイク便の二度来し午後や花三分
ロープウェイの発着所下つくし摘む

人の死に草鮭編まるる花の昼 天野みゆき

丁寧に耳洗ひけり四月馬鹿
何事も起きぬ村にて田水張る
招かれし生前葬や竹の秋
落花浴び狂はざるとは言ひ難し

小林 和子

戒律の鐘の月日にリラ咲けり
隣る世にちちはは忘れ春の泥
雀らに空鮮しき春の泥
春の雲島ごと沖へ流さるる
クレソンに那須の奥嶺の水溢れ

風土独語／神蔵 器



啓蟄や一途の道のありてこそ

安永 圭子

啓蟄は二十四気の一つ、現在の暦では三月六日頃に当る。この頃土中で冬眠している蟻・蛇・蠶・蛙など多くの生物が、ひそみかくれて冬籠っていた穴を出てくる。この頃の雷は「虫出しの雷」とも言われ、雷鳴が冬眠中の虫たちの目を覚ますとも言われているが、実際は気温の上昇と湿度によるものである。

ところで、どんな小さな生物でも目が覚めたからといって漠然とこの世に出て来るのではない。彼等は彼等の使命、目的があり、ひたすら成し遂げねばならない一途の道をもっているのである。ある意味では人間より小さな生物の方がより純粹に一途の道を全うしているのではなからうか。

雪崩情報 山麓駅の黒板に

池田加代子

冬山の登山口に当るもよりの駅は、随時、登山者のために天気予報をはじめ登山情報を出している。特に雪崩などがあれば、雪崩の起きた箇所や規模、注意点など詳細に伝えている。黒板に書き出された緊急な雪崩情報に、この駅全体にただならぬ緊張感が走る。

びんざさら弧を保ちをり初桜

柿沼 盟子

びんざさらは数十枚の札状の小さな板をつくり合わせたもので両端の取っ手を握って動かすと、板同士が打ち合っって音が鳴る。田楽などに用いる楽器ということだが、私は五箇山の民宿に一夜泊ったとき、おかみがこのびんざさらを鳴らして唄ってくれた。素朴な中に哀愁がある。初桜の季語もよかつた。

からくりの頭の立ちて春祭

中村 洋子

この句からはどの春祭か解らないが、私は飛騨高山の春祭を思った。陣屋前に勢揃いして、宮川に添って川筋や町並を十二台の絢爛豪華な山車が祭囃子につれて練り歩く。

掲出句は祭囃子の一笛の音が強くひびくと、飛騨の匠といわれる名人たちが趣向を凝らしたからくり人形が頭を正面に向けてすくと立つ。同時に絢爛豪華な山車がゆつくりと動き出す。祭のはじめ、息をのむ最高の瞬間である。

人の死に草鞋編まるる花の昼

天野みゆき

この草鞋は死者のものではなく、柩を担ぐ人たちのためのものではなからうか。これは私の実家、鶴川村（現町田市）の古くからの習わしで、一つの谷戸が組合と講中に分かれていて、組合の中に葬儀があると、講中の人は、外回りの仕事、墓の六掘りとか、葬列に使う旗、柩を担ぐ人の草履などを作ったりする。この草履は足半草履で、縁側から直接履き下りることも許され、埋葬の終っ

た帰りには辻に履き捨てて来る。

掲出句は草履でなく草鞋である。死者のものかとも思ったが、昔はともかく、こちらは葬儀社がすべて用意してしまうので、津久井の山坂の厳しい天野さんの方では、棺を担ぐ人の足元は草鞋でしっかりと固める必要があったと思う。

広い農家の庭の片隅で、黙々と草鞋を編んでいる。彼らは祖父がしたように、そして父がそうして来たように死者を送り、やがて自分もそうして送られる。明るい花の昼が涙を誘う。

春塵や黒き表紙のマタイ伝

菅原 末野

マタイ伝は新約聖書、第一章に、アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図が書かれ、第五章の「幸福なるかな、心こゝろの貧しき者、天国はその人のものなり、幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん：」とか。第七章の「求めよ、さらば与へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん：」など若い日心を躍らせて、時に涙を流して読んだものである。

あれから私の場合約五十年、聖書協会連盟発行の「新約聖書」は書棚の隅にあつて、ほとんど開かれることなく来てしまつた。表紙は黒で革に見えるけれどレザークロスである。胸を患つて寝ていた時なので、舊新一冊は病人には重すぎたのか、中は四つに小分けして綴られている。

長いこと読むこともなく、たとえ春塵にまみれていても、聖書はわが心の糧、わが良心である。作者末野さんには末野さんの深い思いがあるであろう。

初音きく五山一位の裏山に

落合 絹代

五山は鎌倉五山、京都五山、関東五山などあるが、この句の五山は鎌倉五山、しかも五山一位といえば建長寺である。二位円覚寺、三位寿福寺、四位浄智寺、五位浄妙寺となっている。

この句、建長寺と言つてしまえばそれまでだが、「五山一位」という表現で、数ある鎌倉の寺の中でも臨済宗の大寺の風格、歴史、広大な境内の様相までが手に取るように見えてくる。表現、言葉の選択の大切さである。

三島手の茶碗に盛りし菜飯かな

島田 和子

和子さんの句は比較的に地味である。三島手は李朝初期から中期にかけて焼かれたといわれ、高麗茶碗の一つ、三島暦の文様の趣に似た縄目のような文様が特色である。通人好みというか落ち着いた趣がある。菜飯を盛るにふさわしい。

鶯待つ一本の木になりきりて

三好 守

中村苑子さんの第一句集『水妖詞館』に
昨日から木となり春の丘に立つ

苑子

がある。私が苑子の世界に魅了された最初である。

掲出句は苑子さんの句と似ているが、苑子さんの句は人間を捨ててしまったすがすがしい妖しさがあり、三好さんの句は目的もったやさしい明るさがある。明日を信じて生きている人間として三好さんの句もよからう。

風土集



神蔵器選

教卓にかたかごの鉢のせてあり
灯さるる加賀前田家の雛の間
横浜 中村 洋子

一列に勅使の過ぐる春祭
からくりの頭の立ちて春祭

源氏読む枝垂桜を真向ひに
早朝のニユース原稿浅蜷汁
東京 中嶋 陽子

皮製のベビースューズや初桜
一木は須佐之男命彼岸かな

大繩の大地を蹴りぬ春一番
春雷やヘッドホンより音漏るる

黒髪のひひなに妬心持ちにけり
水温む人待つ心となつてをり
東京 遊橋恵美子

卒業す隔世遺伝のふたゑくぼ
良寛

亀鳴くや拈華微笑の愛であり

水琴窟の音階探るおぼろかな
吹きつづけたき石鹼玉放哉忌
伊東 三好 守

花咲くや戸毎に触れる風の音
目で交す漁の合図や風光る

鶯待つ一本の木になりきりて
音はづすプラスチックや長閑なり
千葉 小林 共代

みちのくの初花ひとつふたつみつ
お城下の田打桜のかがよへり

青き踏む奥の細道 十念寺
芭蕉の間等躬の間に春惜しむ

田を起す一人の影や伊達郡
ふたたびの木喰生家初音かな
東京 林 裕子

ものの芽や瓦の上がる寺普請
あたたかや丸く減りたる護符版木

雪嶺も七面山もかぎろへる